第１章　佐伯市の概要

第１節　自然的・地理的環境

１－１　佐伯市の位置・面積

本市は大分県南東部に位置し、北は津久見市及び臼杵市、西は豊後大野市、南は宮崎県に接し、南部から西部にかけては「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク」の一画をなす山岳地帯によって仕切られている。東部は豊後水道・日向灘に面し、四国を望む南北 270 ㎞に及ぶリアス海岸が続いており、この海岸線は「日豊海岸国定公園」に指定されている。

現在の市域は、平成 17 年（2005）に旧佐伯市と上浦町・弥生町・本匠村・宇目町・直川村・鶴見町・米水津村・蒲江町の１市及び旧南海部郡５町３村の合併によるもので、東西 57.1km、南北 37.2km、総面積は 903.14 ㎢となり、九州一広い面積を持つまちである。

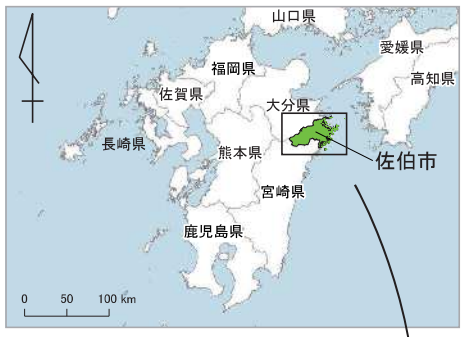

図 1-1　位置図

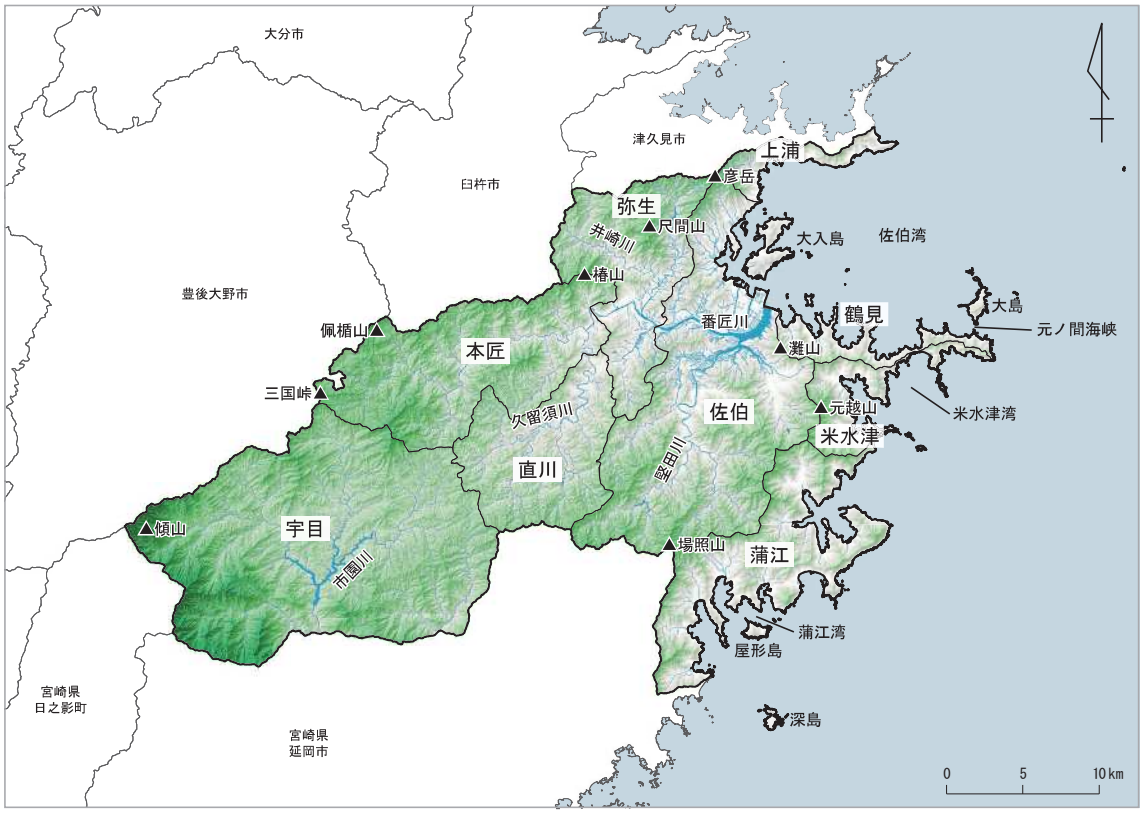

図 1-2　全体図

1－2　地名の由来と沿革

「佐伯」の地名の由来については諸説ある。主なものでは、江戸時代に編さんされた『豊後国志』の中で引用されている「豊日志」に、豊後守に任じられた佐伯宿禰久良麻呂が穂門に住んだため、この地を佐伯と名付けたという記載がある。一方で郷土史研究家により、伊予の佐伯部が移り住んできたためという説も挙げられている。

「佐伯」の読み方には、「さいき」と「さえき」の２通りがある。いずれが正しいか定かではないが、古代以来いずれの用例も見られ、必ずしも一定していなかったと考えられる。長らく両様の読みが混同して使われていたようだが、大正５年（1916）に佐伯町会において「さいき」と読むことが決定され、以降、正式に「さいき」となり、現在に至っている。

本市の市域は、歴史をさかのぼると古代の海部郡南部の穂門郷と、大野郡南部の三重郷の一部にあたる。江戸時代には、前者は佐伯藩の大部分、後者はのちに大野郡宇目郷となり、さらに岡藩の一部である宇目郷となったと考えられる。明治時代以降、合併を繰り返して現在の市域が形成されるが、この頃の宇目郷は、道路整備が進んで南海部郡との結びつきが強まっており、重ねての要望を経て、大野郡から南海部郡へと編入された。現在の市域は、旧佐伯市と南海部郡に属していた周辺の８か町村が平成 17 年（2005）に合併し、新たな佐伯市となって定まった。このような旧市町村の沿革をまとめると、下図のようになる（図 1-3）。

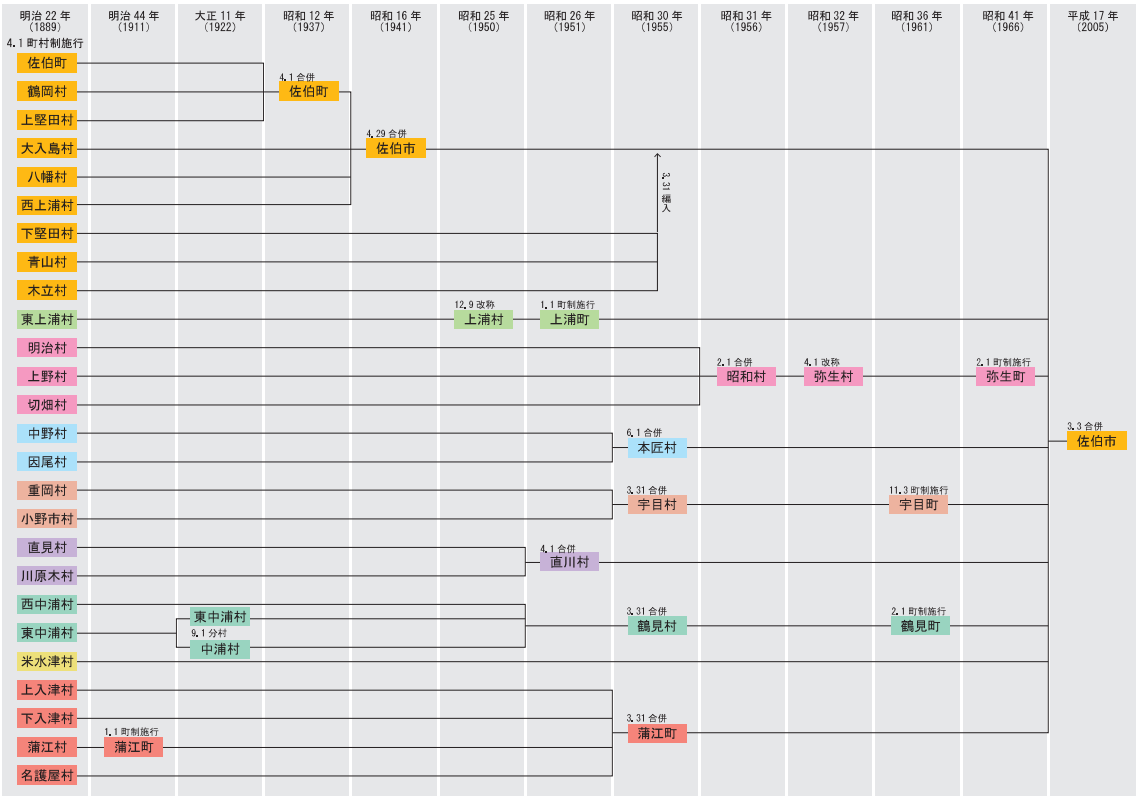

図 1-3　本市の沿革

1－3　地形・地質

本市は、北に彦岳、尺間山、椿山、冠岳、北西に佩楯山、三国峠、西に傾山、南西に夏木山、桑原山、南東に場照山と元越山などの急峻な山々が広い地域で連なっており、複雑な地形と、それに育まれた豊かな森林資源に囲まれている。

地質としては、市内の大半は四万十帯に属し、砂岩・泥岩の互層からなる地層が分布する。上浦地区から本匠地区にかけては秩父帯に属し、石灰岩層の分布が見られる。また、約９万年前の阿蘇山噴火時の火砕流が形成した凝灰岩層が、宇目地区や直川地区の河川沿いの低地に点在している。

本市の主要河川である番匠川は、本匠地区の三国峠を源流とし、幹川流路の延長38km、流域面積464㎢の一級河川である。急峻で屈曲の多い渓谷を通り、久留須川や井崎川などと合流して東に流れ、山間部を抜けるとゆるやかに蛇行して市街地に至る。さらに最大の支流である堅田川と合流し、灘山の麓に沿って佐伯湾に注いでいる。宇目地区では、五ヶ瀬川水系の最大の支流である北川が南に流れ、宮崎県延岡市で五ヶ瀬川に合流して太平洋に達する。

日豊海岸に面した海岸部においては、極めて多くの変化に富んだリアス海岸特有の複雑な入り江が形成され、中世から沿岸を航行する船舶の寄港地となっていた。佐伯湾、米水津湾、蒲江湾は天然の良港となっており、豊富な水産資源に恵まれている。周辺の海域には、佐伯湾に浮かぶ大入島、元ノ間海峡を隔てた大島、豊後水道の中央に位置する水ノ子島、蒲江港の南方に浮かぶ屋形島、深島などが点在している。また、佐伯地区には向島、中の島、女島といった、かつてその地区が島だったことを想起させる地名が見られる。

沿岸部の米水津地区にある龍神池は、浜堤で閉塞された潟湖で、湖底堆積物の調査が行われた結果、3,300年間に及ぶ地震・津波の痕跡がうかがえる場所として、地震研究の観点から注目されている。

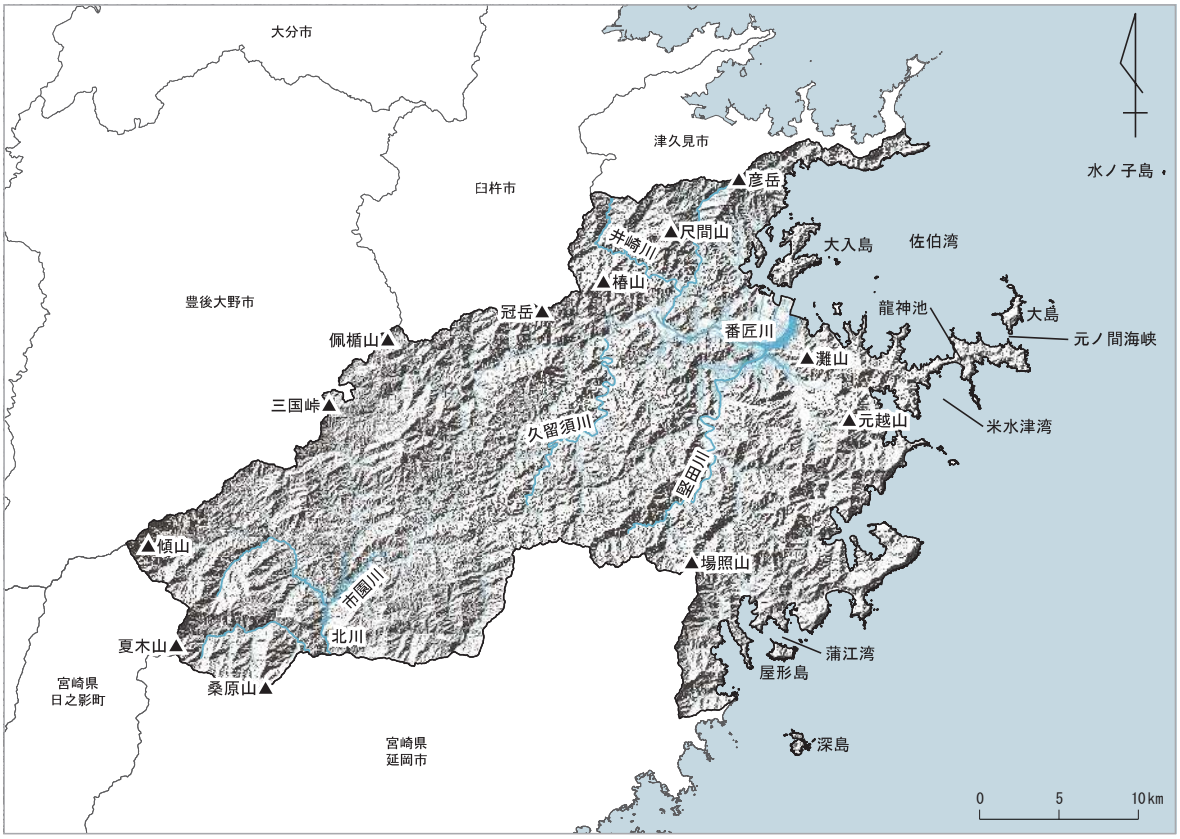

図 1-4　地形図

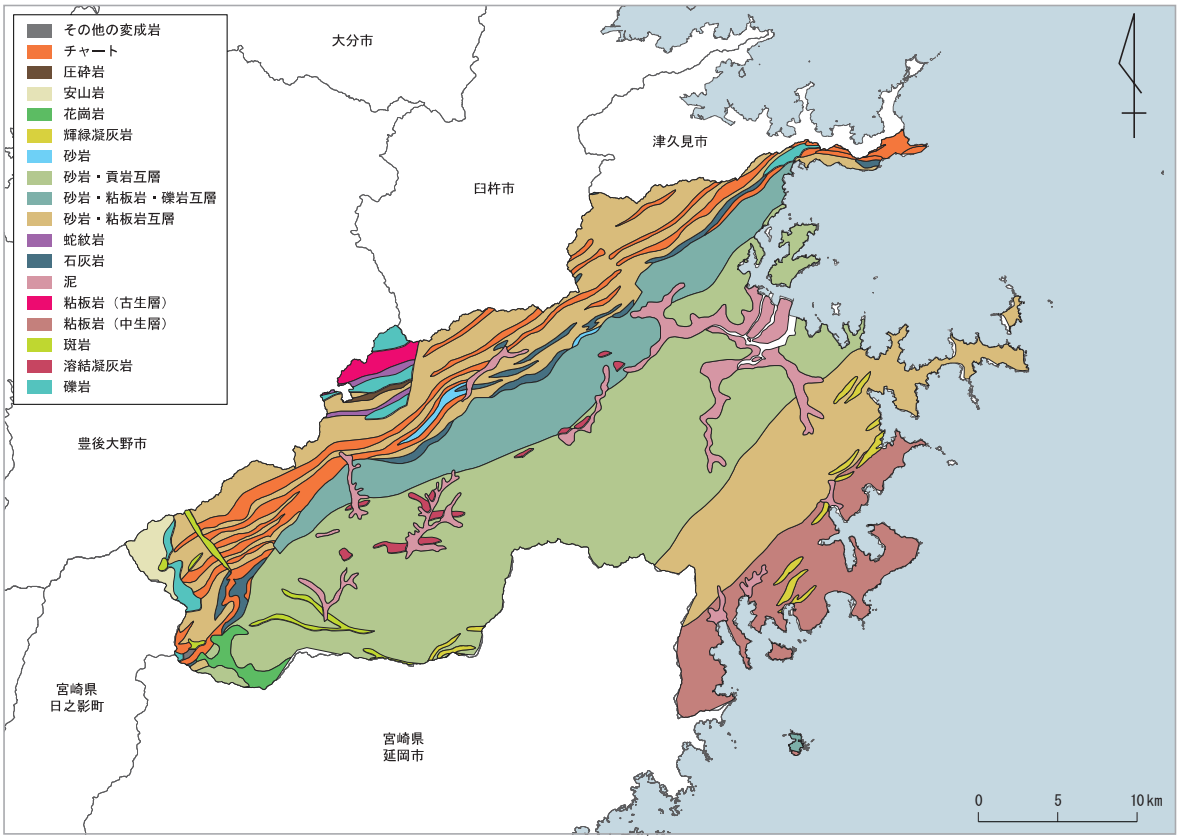

図 1-5　地質図

1－4　気候

本市の気候は、温暖多雨を特徴とする南海型気候に属しており、山間部・海岸部・平野部の大きく３つの地域に分かれる。

市全体の年平均気温は 16℃前後であるが、全域で１年を通して気温の変動幅は大きく、夏期には 30℃を越え、冬期には零下まで下がることもある。山間部の宇目と海岸部の蒲江を比較すると、暖流（黒潮）の影響を受ける海岸部は特に暖かく、蒲江の平均気温が３℃近く高い。そのため海岸部の多くが無霜地帯となっている。平野部の気温は山間部と海岸部の間に収まり、海岸部とともに積雪はほとんどないが、山間部では、冬季に特有の吹き下ろしによって、一部の地域で積雪や霜が見られる。

降水量は年平均 2,200 ㎜から 2,400 ㎜前後で、その 70％が梅雨期と初秋を中心に来襲する台風によってもたらされるものである。平野部の降水量の値は気温と同様、山間部と海岸部の間に収まる。海岸部では６月上旬の入梅の頃から多量の降雨がもたらされ、１か月平均 300 ㎜に達する場合がある一方、冬季は晴天が多い特徴を有している。山間部では台風の影響が特に大きく、７月から９月にかけて雨量が顕著に多い（図 1-6）。

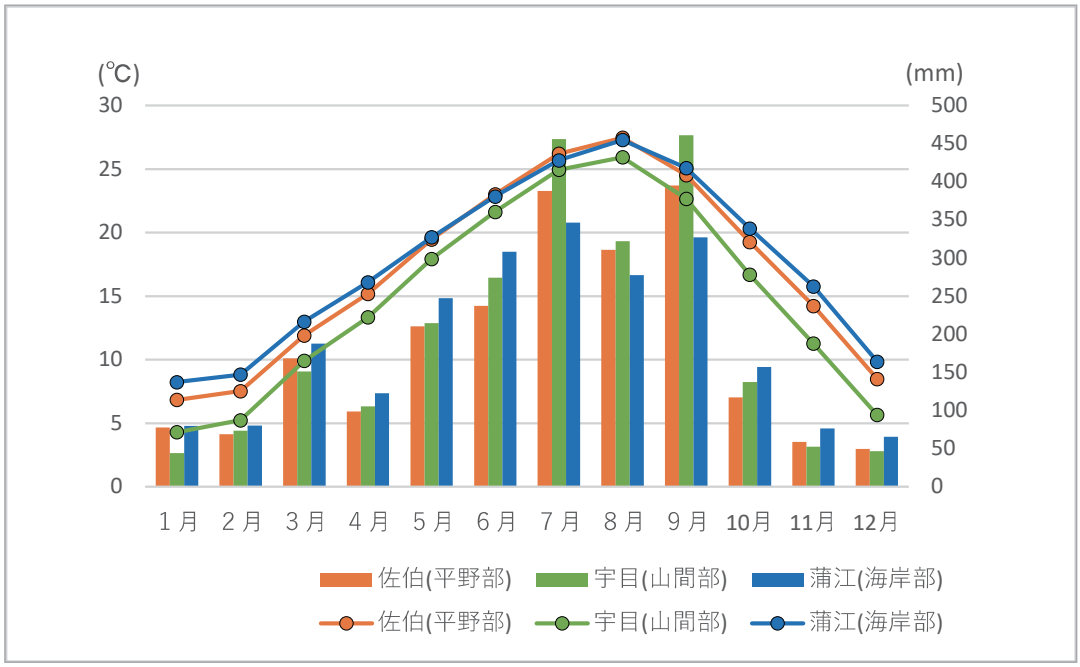

図 1-6　本市の平均気温・降水量
（過去５年平均　気象庁 HP より作成）

1－5　動植物

【動物】

動物相は、ほ乳類では傾山系の特別天然記念物に指定されているカモシカをはじめ、ヤマネ・カワネズミ、本匠地区の石灰岩の洞窟に住むノレンコウモリなどが生息している。その他、シカ・イノシシ・サルなどが確認されている。

鳥類では、沖黒島にカワウ・オオミズナギドリの営巣地があるほか、佐伯・弥生・宇目・直川地区のクマタカ・オオタカ・蒲江地区のカラスバト、傾山系のホシガラス、宇目・本匠地区のアカショウビンなどの生息情報がある。宇目地区の北川ダムではブッポウソウの営巣も認められる。

は虫類では、佐伯・鶴見・弥生地区のシロマダラ、鶴見・蒲江・本匠地区のタワヤモリなどが生息していて、蒲江地区の元猿（もとさる）海岸、米水津地区の間越（はざこ）海岸はウミガメの産卵地として知られる。

両生類では、佐伯・弥生地区をはじめとした広い範囲に県の天然記念物に指定されているオオイタサンショウウオが生息し、特に城山は標準産地となっている。近年の研究で独立した種に分類された祖母・傾山系の固有種であるソボサンショウウオは、宇目地区での生息が確認されている。

図 1-7　佐伯城山のオオイタサンショウウオ（佐伯地区）

魚類では、番匠川水系の淡水域において、アユ・ウナギ・アマゴなど 30 種類の淡水魚が確認されている。下流の汽水（きすい）域では、シロウオを含む 55 種類が確認されている。春には袋網を使ったシロウオ漁が見られ、佐伯の風物詩として知られている。

海水魚は、豊かな漁場として知られる豊後水道・日向灘において、ブリ・ヒラメ・アジなど 816 種類が確認されている。江戸時代に「佐伯の殿様浦でもつ」と言われたように、現在もなお、豊富かつ多種多様な魚類が生息している。

その他の動物では、佐伯（さいき）地区狩生（かりう）の狩生鍾乳洞に生息するノムラマシラグモ・カリウオニアリズカムシなどの真洞穴性の動物、本匠地区のゲンジボタル、鶴見地区のヒメボタルなど、また本匠地区の石灰岩地のオナガラムシオイガイ、蒲江地区のムラサキオカヤドカリなどの貴重な生物が多く生息している。

【植物】

本市の植物は、海岸部から山間部にかけて多くの種類が多様に生育している。

海岸部では、岩上に亜熱帯系のアコウが点在し、大島では林になって生育している。岩場を中心に乾燥に強いウバメガシの林が蒲江地区の仙崎山以北に見られ、上浦・鶴見地区には生育状態の良い林が広がる。典型的なスダジイ林は、佐伯地区海崎の大宮八幡、蒲江地区蒲江浦の王子神社の社叢などに見ることができる。弥生地区の愛宕神社、直川地区の熊野神社など、一部の社叢にはイチイガシが残っている。特筆すべきは、佐伯地区長谷と弥生地区江良に残るハナガガシの林で、それぞれ国と県の天然記念物に指定されている。

図 1-8　八坂神社のハナガガシ林（弥生地区）

標高 600 m あたりには、宇目地区南田原の鷹鳥屋神社の社叢に代表されるようなアカガシの林がある。常緑広葉樹林は 800 m あたりからツガ･モミの針葉樹林となり、傾山、夏木山などの 1,000 m あたりからブナ・ミズナラの林となって、林床はスズタケが繁っている。これらの地域では山頂の岩場を中心にヒメコマツ（ゴヨウマツ）・ツクシシャクナゲの林となっている。

河川では、汽水域にヨシ、淡水域の礫河原にツルヨシが繁茂する。番匠川河口付近にはハマボウの群落が分布している。中流域にはセキショウモ、堅田川のヒメバイカモなど、県内では他に見られない植物を見ることができる。

市内で広く見られる人工林は、谷や斜面にスギ、尾根などにヒノキが分布している。また、一部シイタケ原木としてのクヌギやコナラがある。その他特記すべき植物として、蒲江地区葛原浦のカマエカズラ、沖黒島と米水津地区竹野浦のビロウ、本匠地区小半のホウライクジャクなどがある。

図 1-9　竹野浦のビロウ（米水津地区）

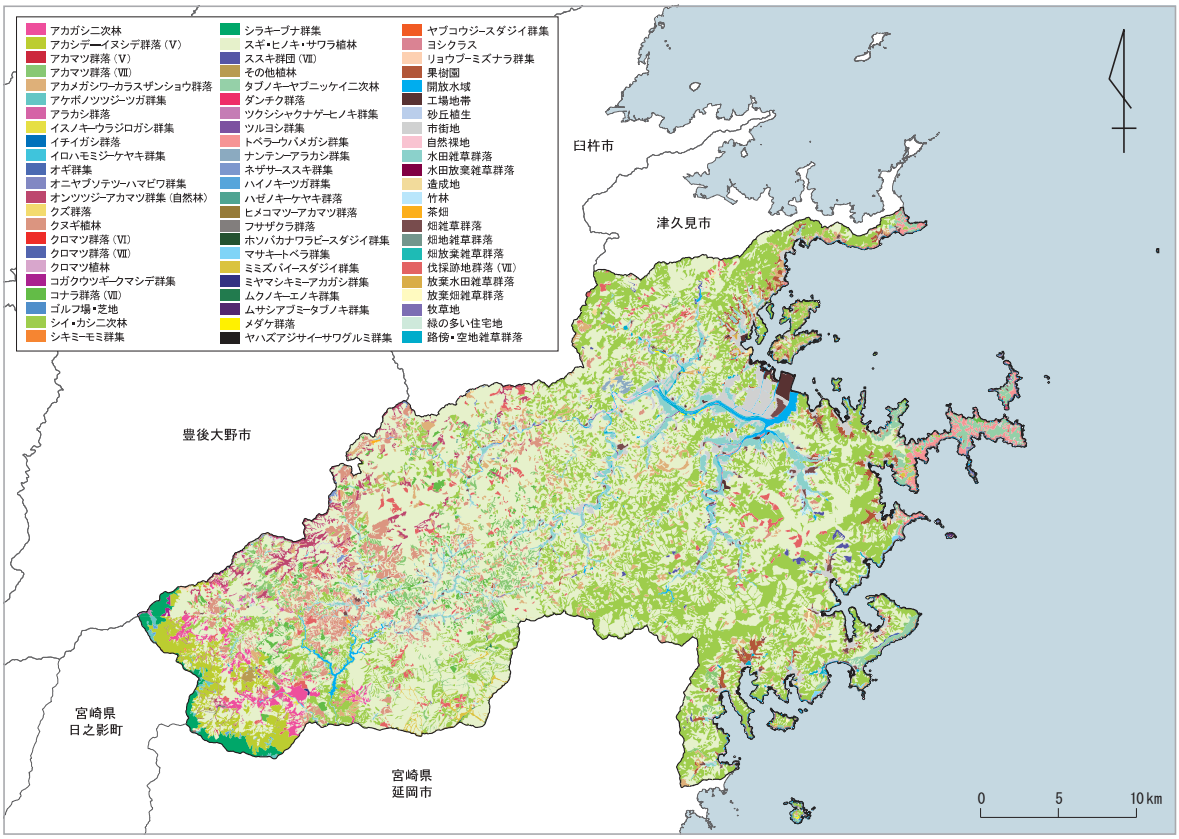
アカガシ二次林
アカシデ―イヌシデ群落（V）
アカマツ群落（V）
アカマツ群落（VII）
アカメガシワ―カラスザンショウ群落
アケボノツツジ―ツガ群集
アラカシ群落
イスノキ―ウラジロガシ群集
イチイガシ群落
イロハモミジ―ケヤキ群集
オギ群集
オニヤブソテツ―ハマビワ群集
オンツツジ―アカマツ群集（自然林）
クズ群落
クヌギ植林
クロマツ群落（VI）
クロマツ群落（VII）
クロマツ植林
コガクウツギ―クマシデ群集
コナラ群落（VII）
ゴルフ場・芝地
シイ・カシ二次林
シキミ―モミ群集
シラキ―ブナ群集
スギ・ヒノキ・サワラ植林
ススキ群団（VII）
その他植林
タブノキ―ヤブニッケイ二次林
ダンチク群落
ツクシシャクナゲ―ヒノキ群集
ツルヨシ群集
トベラ―ウバメガシ群集
ナンテン―アラカシ群集
ネザサ―ススキ群集
ハイノキ―ツガ群集
ハゼノキ―ケヤキ群落
ヒメコマツ―アカマツ群落
フサザクラ群落
ホソバカナワラビ―スダジイ群集
マサキ―トベラ群集
ミミズバイ―スダジイ群集
ミヤマシキミ―アカガシ群集
ムクノキ―エノキ群集
ムサシアブミ―タブノキ群集
メダケ群落
ヤハズアジサイ―サワグルミ群集
ヤブコウジ―スダジイ群集
ヨシクラス
リョウブ―ミズナラ群集
果樹園
開放水域
工場地帯
砂丘植生
市街地
自然裸地
水田雑草群落
水田放棄雑草群落
造成地
竹林
茶畑
畑雑草群落
畑地雑草群落
畑放棄雑草群落
伐採跡地群落（VII）
放棄水田雑草群落
放棄畑雑草群落
牧草地
緑の多い住宅地
路傍・空地雑草群落
臼杵市
津久見市
豊後大野市
宮崎県
日之影町
宮崎県
延岡市
0
5
10km

図 1-10　植生図

1－6　景観

多様な地形･地質･歴史的背景のもと形成された本市の景観は、令和元年度（2019）に策定された『佐伯市景観計画』において、土地利用の方法、様々な景観資源から、以下の３つのエリアに区分されている。

【街エリア】

番匠川河口部の平坦地に広がる市街地は、国道 217 号などの幹線道路が通り、JR 佐伯駅や市役所などがあり、本市の中心的な市街地景観を形成している。その周辺には城山、濃霞（のうか）山などの山や、市街地を流れる河川などの豊かな自然環境が残されており、市街地の景観に潤いを与えている。

佐伯城跡は、市街地を見下ろす標高 144 m の城山に築かれた近世の城跡で、本市のシンボルとして広く市民に親しまれている。城山の麓には、佐伯城三の丸櫓門（やぐらもん）や、旧藩士家の建物などがあり、江戸時代の佇まいが残る、存在感のある歴史的景観資源となっている。

船頭（せんどう）町は、昔ながらの商店や旅館、酒蔵など城下町の面影が残り、情緒ある街並みが形成されている。また、江戸時代に参勤交代や物資の輸送のため、江戸や大坂などへ向かう発着点となった船着き場がいくつかあり、近代まで利用されていた。現在、船着き場の１つは、当時をイメージした札場（ふだば）広場として整備されている。

沿岸部には、近隣の離島や沿岸域との交通の要衝である佐伯港があり、造船などの規模の大きな工場が集積した、工業地の景観を形成している。

図 1-11 「街エリア」山際周辺地区（左）・船頭町地区（右）の景観イメージ
（『佐伯市景観計画』より抜粋）

【里エリア】

自然豊かな山林や集落の後背の里山によって、多様な景観が形成されている。山の奥深くには、渓谷や滝などの景勝地があり、季節の移り変わりや特徴的な生態系などにより、豊かな自然景観を形成している。

番匠川など河川の中流部の平坦地には、背景の山並みや河川沿いの農地、集落などが一体となった農村集落景観や山村集落景観が形成されており、その集落を含む周囲の山の尾根や田園を見渡すことができる。また、古くから集落ごとに祀（まつ）られている寺

社や、田畑に水を供給する井堰（いせき）・井路（いろ）、地蔵や庚申塔（こうしんとう）のような石造物などが、地域の生業や歴史を感じさせる里エリア特有の景観資源となっている。

図 1-12 「里エリア」の代表的景観（宇目地区塩見園）

【浦エリア】

砂浜海岸や急峻な崖、奇岩など多様な環境を有した美しい海・海岸によって景観が形成されている。

日豊海岸国定公園に指定されている海岸は、尾根が海まで突き出した屈曲の多いリアス海岸であるため、急峻な岩場や斜面のウバメガシ林が海岸まで迫った、雄大な自然景観が形成されている。また、豊後二見ヶ浦などの自然景勝地があり、浦エリアの重要な景観資源となっている。

リアス海岸の湾奥の平坦地には、漁港や市街地・集落が集まっており、穏やかな海や自然海岸と一体となった漁村集落景観が形成されている。山林の尾根を通る道や山頂付近からは、広い海や遠方の島、漁村集落などを一望することができる。

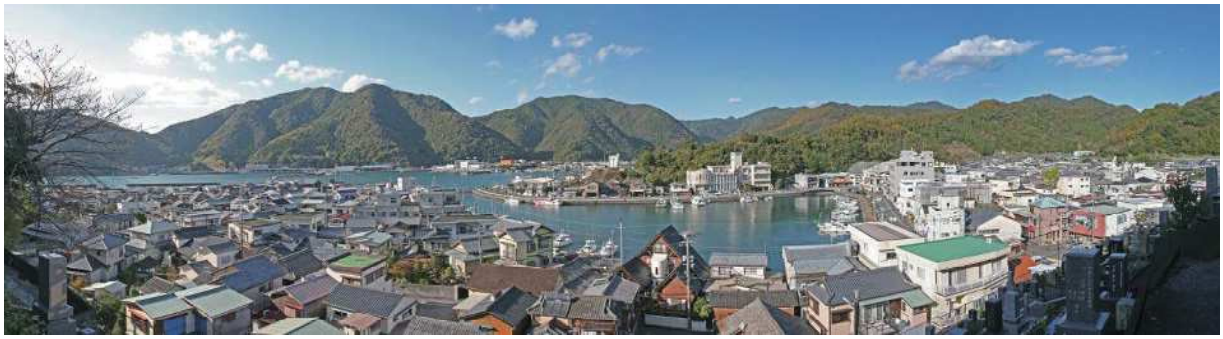

図 1-13 「浦エリア」の代表的景観（蒲江地区蒲江浦）

第２節　社会的状況

２－１　人口動態

本市の人口は、令和２年（2020）時点（国勢調査）で 66,851 人、世帯数は 28,716 世帯となっている。図 1-14 に示すように、近年の人口推移（旧市町村を含む現在の市域）を見ると、平成７年（1995）の調査で 88,116 人であった人口が、年々減少していることがわかる。さらに、国立社会保障・人口問題研究所や同所の推計を基にした本市独自の推計では、今後も人口減少が続き、令和 22 年（2040）には５万人を割り、令和 42 年（2060）には 29,889 人となる推計がなされている。特に生産年齢人口（15 ～ 64 歳）の減少が顕著に見られる。これに伴い、労働力が低下し、生産性や地域経済の縮小が予想されるほか、地域の祭り、行事などのコミュニティ活動の継続が困難になることが懸念される。

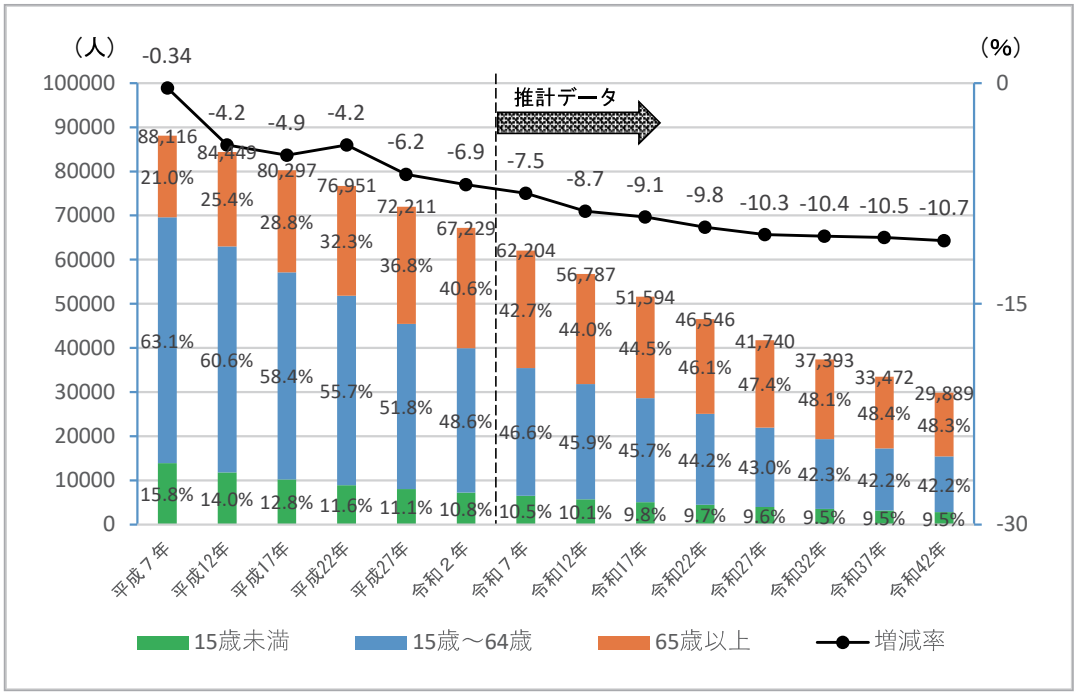

図 1-14　本市の年齢別人口の推移

（令和２年度国勢調査結果及び『第２期佐伯市まち・ひと・しごと創生総合戦略』をもとに作成）

２－２　産業

佐伯市は海・山・里が揃う自然の豊かな地域だけに、農林水産業が盛んである。

本市の東部は豊後水道に面しており、豊かな漁場が広がっている。そのため、県内の水産業生産量の 6.5 割を占めており、県下随一の水産都市と言える。特にブリ類やヒラメを中心とした養殖業は全県生産量の８割を占めている。また、漁船漁業も盛んで、イワシやアジ、タイなど多くの魚介類を水揚げしている。このうちイワシやアジは干物として加工されることが多く、中でもカタクチイワシは特産物の「佐伯イリコ」として人気が高い。

農業の分野では、温暖な気候を利用した早期米や、安全で安心できる米づくりとして特別栽培米（減農薬栽培）がブランド化されている。その他、独特の香りを持つ本匠地区因尾（いんび）の釜（かま）炒り茶「因尾茶」が有名である。

山地が広がる本市では林業も盛んで、市の面積の９割近くを占める森林のうち、５割強が人工林である。この人工林の７割をスギが占めており、本市のスギは、材質、形状とも木材業界で人気が高い。一方広葉樹を利用した産業では、クヌギ・ナラを原木としたシイタケの栽培も盛んである。

近年では、新鮮な野菜をはじめ農林水産物の加工品など、自然の恩恵を受け発展した各分野の特産品を使って、広くＰＲし観光客誘致に生かす取り組みも活発化している。

他方、工業に目を向けると、造船、水産加工業など豊かな海に関連した産業が発展している。それだけにとどまらず、メカトロニクスや業務用冷蔵庫、医療機器などの製造分野で、全国的に高いシェアを持つ内陸型の企業も立地しており、市全体の製造品出荷額は年 900 億円前後で推移している。

２－３　土地利用

本市は、総面積の多くが山地で、市域の 86％を山林・原野が占めている。番匠川の河口付近に広がる平野部には、市街地が形成され宅地が集中している。一方、周辺の山間部や沿岸部でも、集落が形成され点在しており、人々が生活を営んでいる。

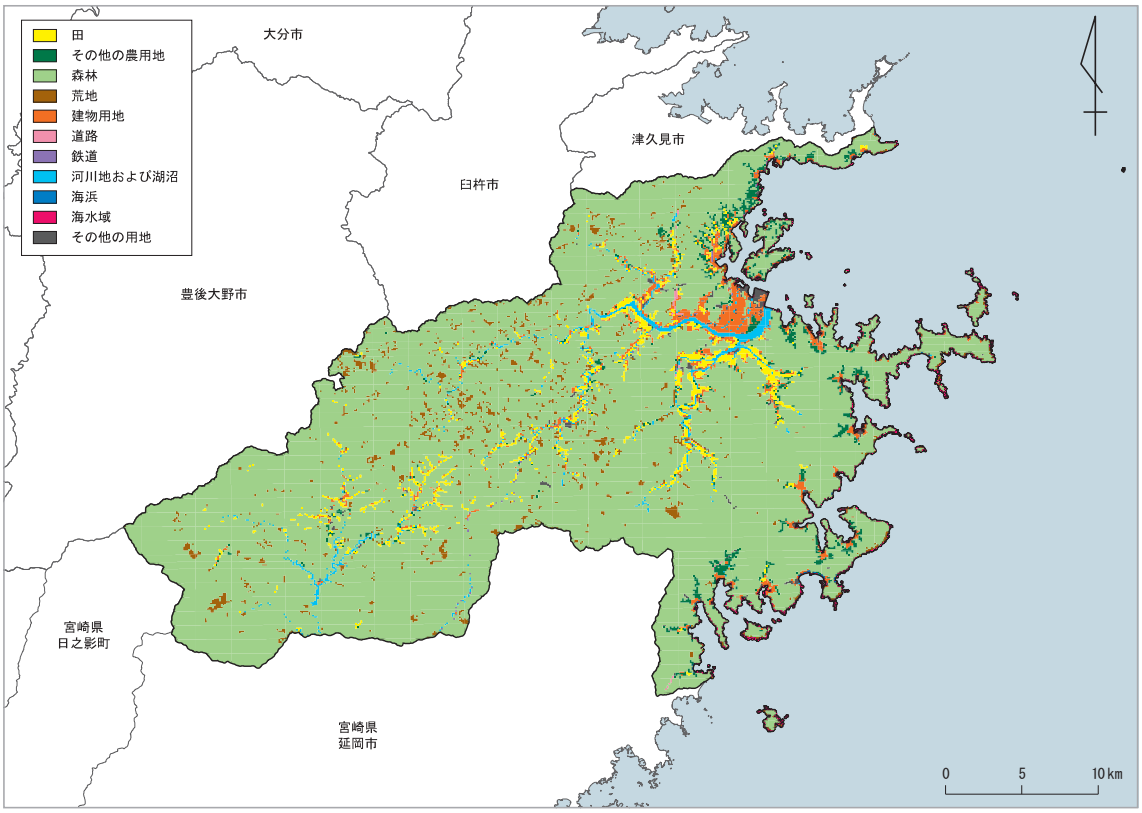

図 1-15　土地利用状況図

2－4　交通

本市域には、本市と大分市（県庁所在地）を結ぶ国道 10 号と国道 217 号、宇目地区を通り宮崎県延岡市に至る国道 326 号、蒲江地区を通り宮崎県を経由し、熊本県にまで至る国道 388 号の４つの国道に加え、多数の県道が走っている。さらに、平成 27 年（2015）には、市内の南北を貫く形で東九州自動車道が開通し、自動車がより往来しやすい環境となった。

公共交通機関としては、鉄道は JR 日豊本線が通り、佐伯駅をはじめ、北は浅海井（あざむい）駅、南は宗太郎（そうたろう）駅など合計９つの駅を有する。各駅で停車する普通列車と、市内では佐伯駅にのみ停車する特急列車の２種類を運行しており、そのうちの特急列車を利用しても、大分駅まではおよそ１時間を要し、時間的な距離が近いとは言えない。バスは、大分バス（株）が県南各地に路線を広げ、本市では大手前のターミナルが核となっていたが、段階的に路線廃止が進み、令和３年（2021）10 月からは全線が佐伯市運営のコミュニティバスへと転換した。しかし近年、自動車への依存が進んでいることから、鉄道・バス利用者は減少傾向にある。

また、本市はいくつもの離島を有する自治体である。佐伯港と大入島を結ぶ航路、佐伯港と鶴見地区の大島を結ぶ航路、そして蒲江地区からは、蒲江港から屋形島・深島を結ぶ航路がそれぞれ運航している。このような離島を結ぶ海上交通は島民唯一の交通機関であり、生活物資の輸送や通院などにおいても重要な航路といえる。

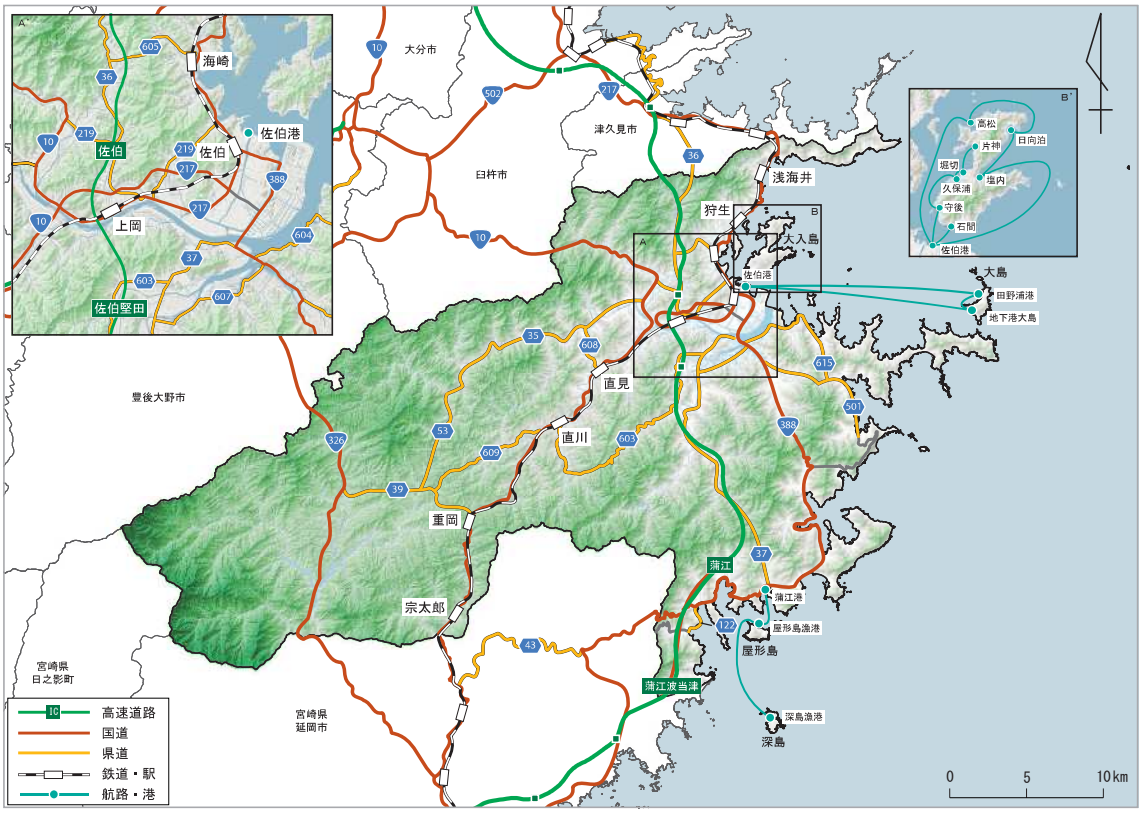

図 1-16　交通網図

2－5　観光

本市は近隣都市や空港からの距離が遠く、有力な観光素材である温泉が湧出しないことに加え、豊富な食材に対して食のバリエーションに乏しい現状がある。

東九州自動車道の開通による観光客数の増加はあったものの、平成 29 年度（2017）以降は各指標が減少傾向に転じ、特に佐伯観光の重要拠点に位置付けられる、道の駅の来客数が大きく落ち込んでいる。さらに令和２年（2020）からの世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大により、観光業は多大な影響を受けた。

一方で、温暖な気候と多様な自然景観に恵まれ、それらが育む優れた食材と、寿司・ごまだし・あつめし・くじゃくに代表される伝統的な食材加工技術を有している。また大分県内有数の規模を誇る総合運動公園、佐伯の歴史に触れることができる佐伯市歴史資料館や佐伯市平和祈念館やわらぎに加え、令和２年には文化芸術活動の拠点となる、さいき城山桜ホールといった様々な魅力的な施設が整備された。

現在はこうした地域資源の磨き上げや、それらを巡るサイクルツーリズムの推進と情報発信に力を入れている。ツール・ド・佐伯（海・山・川の景観や様々な魅力に触れるサイクルイベント）やサイクルロゲイニング（１日開催のスタンプラリーイベント）、マウンテンバイク体験会、様々な自転車に触れてもらうサイクルフェスタはその一例である。

図 1-17　米水津地区の海岸線を見下ろして走る自転車

2－6　歴史文化施設

本市の歴史文化に触れることのできる施設には、以下のものがある。

《佐伯市歴史資料館》

佐伯市歴史資料館は、近世城下町の面影を残す「歴史と文学のみち」の起点に、平成27年（2015）に開館した。「城と城下町のフィールドミュージアム」をコンセプトに、近世を中心として中世から近代初頭までの佐伯の歴史を主要テーマとしている。さまざまな講座や教室も開催し、歴史文化の保存・活用の拠点施設となっている。

図 1-18　佐伯市歴史資料館

《佐伯市平和祈念館やわらぎ》

佐伯市平和祈念館やわらぎは、平成９年（1997）に旧佐伯海軍航空隊兵舎の跡地に開館した。昭和９年（1934）の佐伯海軍航空隊設置をきっかけに市街地が発展した一方、太平洋戦争では空襲による被害も大きかった佐伯の歴史的事実を後世に伝え、平和な未来を考える学びの場である。

図 1-19　佐伯市平和祈念館やわらぎ

《城下町佐伯国木田独歩館》

城下町佐伯国木田独歩（くにきだどっぽ）館は、明治26年（1893）に教師として赴任した国木田独歩が滞在していた武家屋敷を修理し、独歩と佐伯との関わりを紹介している。屋敷は佐伯藩11代藩主の別荘を、藩の重臣であった坂本家が明治３年（1870）に移築して住居としたもので、本市の有形文化財に指定されている。

図 1-20　城下町佐伯国木田独歩館

《佐伯市蒲江海の資料館》

佐伯市蒲江海の資料館は、国指定重要有形民俗文化財「蒲江の漁撈用具」の収蔵展示施設として、平成17年（2005）に開館した。リアス海岸に育まれた豊富な海洋資源を背景に発達した様々な漁法や加工方法、さらには漁業に関する生活や信仰を示す資料を見ることができる。

図 1-21　佐伯市蒲江海の資料館

《佐伯市本匠郷土資料館》

佐伯市本匠郷土資料館は、大正13年（1924）に建設された、旧因尾村役場を改装した施設である。昭和30年（1955）の村合併で役目を終えた因尾村役場を惜しみ、資料館に改修して利用している。館内では因尾地区周辺で使用された古い生活用具や農機具など、幅広い民俗資料を中心に展示している。

図 1-22　佐伯市本匠郷土資料館

《その他の施設》

自然に関する施設では、清流として知られる番匠川に生息する生き物を展示する、弥生地区の番匠おさかな館や、宇目地区の木浦鉱山で産出する、鉱物と採掘道具を展示する木浦名水館がある。

直川地区の直川憩いの森公園には、農林業に用いた用具などを展示する農業歴史資料館と、直川地区で採集された昆虫標本を展示する昆虫館が設置されている。

このほか、鶴見地区の佐伯市水の子島海事資料館と佐伯市水の子島渡り鳥館は、それぞれ国登録有形文化財「豊後水道海事博物館（旧水ノ子燈台吏員退息所）」、「渡り鳥館（旧水ノ子燈台吏員退息所物置所）」を利用し、水ノ子島灯台の歴史や周辺の自然を紹介している。佐伯市丹賀砲台園地では、市指定史跡「丹賀砲台跡」の見学を通して鶴見地区と戦争の関わりに触れることができる。

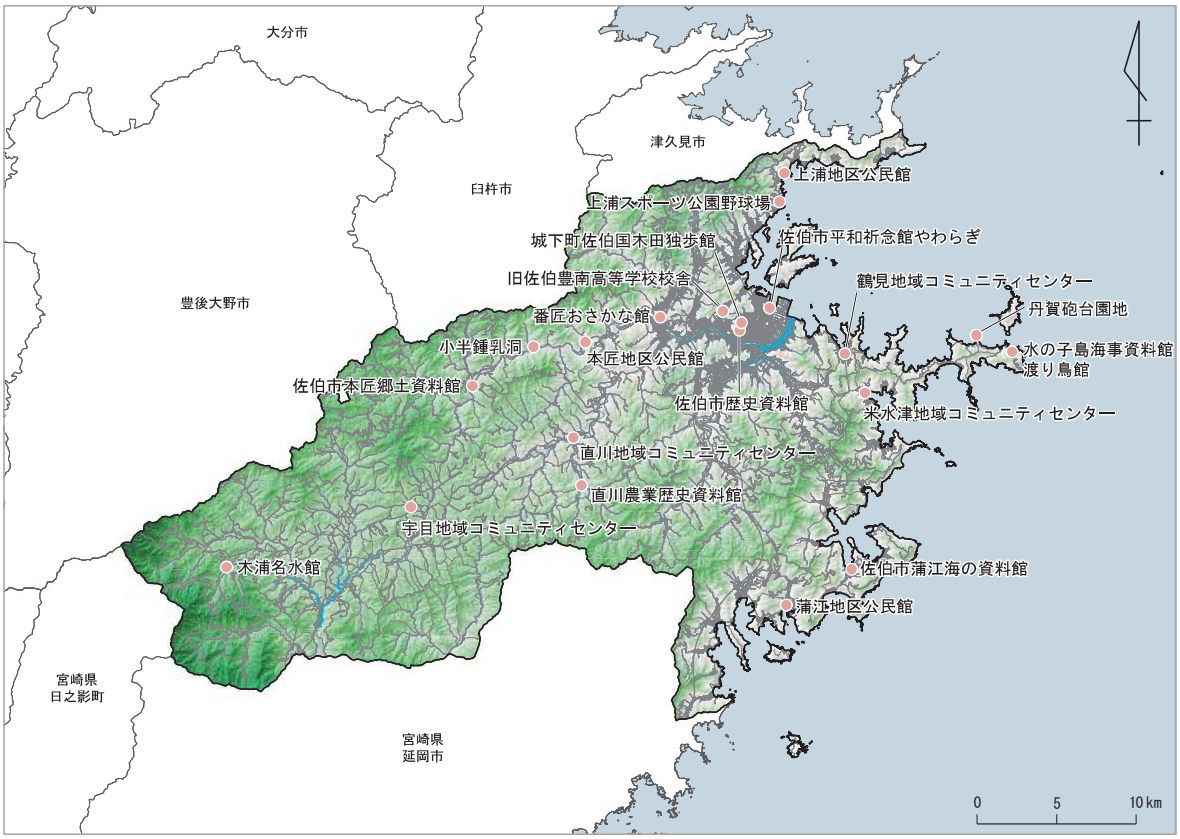

図 1-23　歴史文化関係施設の位置図